

IV-5

多発性骨髄腫における血清 free light chain 定量の臨床的有用性

伊藤淳治¹、清水一之¹、杉浦 勇²、小杉浩史³、津下圭太郎⁴、名倉英一⁵、木下朝博⁶
(FreeLite 研究会)

名古屋市立緑市民病院¹、豊橋市民病院²、大垣市民病院³、中京病院⁴、常滑市民病院⁵、
名古屋大学大学院医学研究科⁶

【目的】前回の報告で血清 free light chain(sFLC)を定量する免疫拡散法は、感度が高く、正確で信頼性のある検査で、骨髄腫の診断と治療効果判定に有用であることを報告した。今回我々は、さらに検討を加え、尿 Bence-Jones(BJ)蛋白同定と sFLC 定量との関係や、治療後の κ/λ 比の重要性など、多発性骨髄腫患者の診断や経過観察における sFLC 測定の意義について新しい知見を得たので報告する。【方法】sFLC は医学生物学研究所(株)から提供を受けたラテックス試薬(英国 Binding Site 社製)を用い免疫拡散法で、免疫グロブリンは免疫比濁法で、BJ 蛋白は寒天ゲルを使った免疫電気泳動法で測定した。また、検体測定に際しては、あらかじめ患者の同意を得た上で行った。【結果】骨髄腫患者の初診時の sFLC とその κ/λ 比は、すべて異常値であった。24 名の骨髄腫患者の sFLC の κ/λ 比は、 κ 型 M 蛋白の患者で平均 192.59(3.15~1266.20)で、 λ 型 M 蛋白の患者は平均 0.0436(0.00005~0.146)であった。完全型免疫グロブリン(intact immunoglobulin)を M 蛋白とする骨髄腫や BJ 型骨髄腫患者では、尿中に BJ 蛋白が検出されない時でも、sFLC が異常値を示すことが多かった。血中の M 蛋白がプレートに達しても、 κ/λ 比に異常がみられた。【結論】sFLC の κ/λ 比は、血中の M 蛋白濃度よりも正確に治療効果を評価できるものと考えられた。